

講演二 古代山城は完成していたのか

講演者紹介

亀田 修一（かめだ しゅういち）

九州大学大学院修士課程在学中に、大韓民国忠南大学校に留学。

現在、岡山理科大学生物地球学部教授。専門は考古学。

・講演二「古代山城は完成していたのか」

亀田 修一（岡山理科大学教授）

はじめに

岡山理科大学の亀田でございます。よろしくお願いいたします。

今、荒木先生が文献の方から細かなお話しをしていただきましたが、私は考古学のほうからお話をさせていただきます。先程の荒木先生のお話にありましたように、古代山城の研究はかなり進んできております。特に、鞠智城に関しましては、いろいろなことが解ってきております。しかし、あまりにも大きな城でありますので、細部のことにつきましては、やはりまだ解らないところがあるようです。

本日、このようなテーマにさせていただきましたのは、実は、神籠石と呼ばれているグループに関しましては、以前から未完成だったのではないのかということが、言われているからです。特に、一〇年前前になるでしょうか、まさに私の田舎なのですが、福岡県の唐原（とうげん）という所で山城が発見されました。ただ、列石、石を並べている状況は確認されるのですが、どうも土塁が見当たらない。調査を進めていくと、水門（水を通すところ）は見つかったのですが、土塁は見当たらない。完成してはいないのではないだろうか、という話になりました。

そして、二、三年前でしょうか、古代山城を主に研究していらっしゃる向井さんという方が、もともと見える

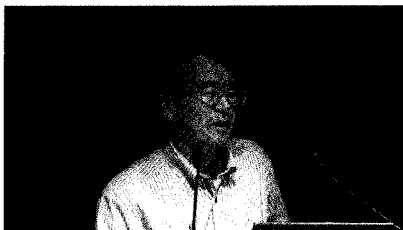


写真5 亀田修一氏

部分しか造る気がなかったのではないかという論文、いわゆる「見せる城」を意識された論文を発表されました。古代山城が「見せる城」であるという考えは、私もそうに思っています。ただし、当初から一部分だけしか造る気がなかったのか。それとも、なんらかの理由で、途中で造ることが止まってしまったのか。先程、荒木先生がおっしゃっていましたけれども、これだけの規模のものを造ろうとすると、やはり時間とお金と労力が掛かりますので、完成までの道のりはそう簡単ではなかったと私も思っています。そこで今日はそのような目で古代山城を見るとどのようなお話ができるのか、お話ししてみたいと思います。

一、完成していたと思われる古代山城

完成していたと思われるものとしては、筑前の大野城、肥前の基肄城、肥後の鞠智城、対馬の金田城、備中の鬼ノ城、そして豊前の御所ヶ谷神籠石があります。御所ヶ谷に関しましては、少し気になる点もありますが、ひとまず入れておきます。

それから、未完成の可能性があるというか、少なくとも完全にはできていないと推測されますものが、今申しました豊前の唐原、そして筑前の阿志岐、筑前の鹿毛馬、筑後の女山、肥前のおつぼ山、播磨の城山などです。この播磨城山城跡は、中世の有名な赤松氏の拠点のお城の一つです。

そしてここで扱います古代山城はスライドの通りですが、三角形のものが名前の分か

る、いわゆる朝鮮式山城です。それから赤いマルが名前の分からない神籠石系のものです。

朝鮮式山城は百済からの亡命貴族がやって来て指導して築いたという記事が『日本書紀』などに記載されています。そして六九八年の鞠智城などの繕治記事とともにもう一つ大事な記録が、『続日本紀』の七一九年条にあります。備後国（現在の広島県の東部）に築かれた茨城と常城つねきを停めるという記事です。つまり七一九年に古代山城の一部は少なくとも一度は機能しなくなるということです。

それから、名前が分からないお城に関しては、一六カ所あります。大きな特徴としては、列石（石が並んでいること）、「城内に建物がない」ということです。鞠智城にはたくさんございますけれども、城内の建物が分からないということは神籠石系の山城の特徴の一つでございます。

それでは、完成していたお城を見ていきたいと思います。

この写真の山に大野城が築かれています。手前が水城です。次にこの図は阿部義平という先生が以前に出された論文によって描かれた図ですが、この図の大きな特徴は大野城跡と基肆城跡を繋ぐ羅城があったということです。羅城は百済にもありまして、城壁がずっと王都周辺を取り囲むようにめぐらされています。その後、阿志岐山城が発見されて、このような図になっております。水城の西側には小水城と言う小さい土塁がありますので、ある程度線的に城壁が繋がれていたことは間違いないと思われます。いずれにしても大野城と基肆城という二つの城と水城によって大宰府が守られるという配置になっていたと思います。

この写真は、大野城の有名な百間石垣です。これは太宰府口城門で、発掘調査されまして、復元図が公開されて

います。この門に関しましては、先程の鞆智城でも出てきましたが、当初、掘立柱建物と言いまして、地面にそのまま柱を埋める方式を採用しています。昔、電信柱を立てるときに穴を掘って木の柱を埋めました。あれと同じようなやり方です。そして次の段階に礎石立ちの方式に変わります。下に石を置いてその上に柱を立てる、そういう方式に変わります。この時期ですが、掘立柱式のⅠ期が七世紀後半で、礎石立ちのⅡ期が八世紀前半頃と考えられています。このように変遷しますが、この変遷が先ほどの繕治記事と関わるのか、関わらないのか気になるところです。いずれにしても、礎石建物に途中で変わるといのが分かっています。

この写真は城内の状況です。主城原地区です。「主城原」という地名ですので、主な偉い人がいた場所ではないかと言われています。掘立柱建物がまずあり、のちに礎石建物に変わることが確認されています。この写真は礎石を使った建物の倉庫群です。七〇棟くらいあると言われています。この礎石建物群の時期について、最近若い研究者の方々から、これはすべて八世紀以降のもので、七世紀代にはこういうものはなかったのではないか、という意見も出ています。この図面は大野城の城壁の断面図です。大野城跡は、数年前でしょうか、大雨で城壁がかなり壊れました。それで福岡県の担当者の方が、頑張つて調査を進めまして、確認された城壁の積み直しの様子です。中央右に下がる太い線の右側が積み直したものと考えられています。つまり、本来この太い線の右側にも城壁はあったのですが、何等かの理由で流れてしまい、そこをもう一回積み直したと理解されています。これが、先程の「繕治」に当たるのか、単なる「修繕」なのか、よく分かりませんが、いずれにしても、積み直しがあるだろうということが、ここで確認されています。

大野城跡の瓦です。この一番左の瓦が鞠智城跡の瓦と多少近いと言われています。これが、先程の主城原というところの、掘立柱建物に使われたと考えられておりまして、まさに六六五年頃の瓦ではないのかと言われている。この資料は、お手元のレジュメの三二頁のところに図を添付しております。この④番の瓦ですが、老司式（ろうじしき）と言いまして、奈良の藤原宮関係の瓦の影響を受けたものだと言われています。これが六九八年の緒治（じゆぢ）のときのもののなか、もうひとつ後の、八世紀前半代まで下がるのかどうか、よく分かっていません。②番、③番の百済系単弁瓦と呼ばれているものが、七世紀後半の瓦と考えられていますが、大野城創建時の六六五年まで遡るのか、六九八年の緒治（じゆぢ）の時期のものなのか、細かいところはよく分かっていません。そしてこの写真の右側の瓦が鴻臚館（こうらく）式と言う瓦で、大宰府の政庁、大宰府のメインの建物が、八世紀前半に礎石建物に変わって、本格的な官衙に採用される「コの字形」配置の建物群で使用されたと考えられているものです。先程の老司式瓦はこれよりは少し古いと言われています。そういう意味で少し微妙なところの瓦が、ポツポツと出ている状況になります。

次に基肆城ですが、このように土塁がありまして、有名なものが写真の水門です。この石積みが最近壊れてきたので積み直すことになり、発掘調査をいたしましたら、新たな水門（水の排水口）が三つ発見されました。そしてこの基肆城跡におきましても城内で礎石建物が見つかっております。この第九地点の建物を発掘しましたら、大野城のものと類似した礎石建物が見つかりましたが、この建物の横でこのような瓦が出土しています。これは九州の小田富士雄先生という、瓦の権威の先生が、以前からこれが六六五年か、または六九八年のどちらか、少

なくとも七世紀後半の瓦だ、とおっしゃっている瓦です。そして、この瓦がこの礎石建物の横で出ますので、素直に考えれば、この礎石建物は七世紀代のもの、下がっても八世紀初頭くらいまでのもので、いわゆる繕治に関わる可能性も考えられているものです。

そして、基肄城に關しましては、木簡が大宰府で見つかっております。この木簡の中に、基肄城の米を筑前と筑後と肥国に出すという内容が書かれていて、そのような倉庫的機能が基肄城にあったと注目されている木簡です。

そして先程の瓦のお話ですが、これらの瓦を創建時にするのか、繕治時にするのか、やはり大野城跡の瓦と同じように難しいところです。この①、②番の単弁瓦とこの④番の重弧文瓦が普通セットになると言われています。この⑤番の瓦は、東北門跡の瓦で、老司式です。③番の瓦は残りが悪いですが、大宰府では八世紀の前半と考えられておりまして、老司系で⑤番などの瓦と組み合わせます。つまり、これらの③番と⑤番の瓦は八世紀前半の瓦と考えられます。これらの状況を素直に考えれば、七世紀の後半から末ころの瓦と、八世紀前半の瓦があるということになります。つまり、明らかに八世紀前半代に何かの建物を建てるなり、修繕するなどの仕事をしていることが、瓦からは想像できるということです。

この図は基肄城跡内で出土した土器です。①番と②番は、口の縁の内側が飛び出しています。「かえり」といいますが、このような形のものですと、大体七世紀の終わりの土器と考えられます。そして、③番から⑩番のものは八世紀代、一部九世紀に入るものもあるようです。その中で興味深いものが③番です。蓋の上の面に

「山寺」と書かれています。この山寺が基肄城の中にあつたのか、あるいは別の所からこの土器を持ってきたのかわかりませんが、とてもおもしろい資料です。実は各地の古代山城が城の機能を失った後に、お寺さんやお宮さんになるということが結構あります。九州の方で有名なものでしたら、高良山神籠石が福岡県の久留米にあります。そこには高良大社があります。お宮さんです。それから山口県の石城山神籠石にも、延喜式の式内社である石城神社がございます。それから、香川県の屋嶋城、源平の戦いで出てくる屋島にありますが、あそこは屋島寺というお寺になります。

次に、対馬の金田城のお話をします。現在も調査・整備が徐々に進んでおります。写真に見られますように、立派な石垣が残っています。このように城壁すべてを石で造っている山城は、基本的には金田城だけです。そういう意味では特異な城といえます。ただし城内に土塁が一部ございます。あと、もう一つ興味深い点は、ここに人が立っています。三ノ城戸（城門）の城外です。中が内側で、ここに壁がございまして、この人の頭くらいの高さに門の床がございます。右側は大水で流されてしまいました。ここを復元しますと、下の図の点線のようになるようです。そうしますと、人が立っている足下の高さと想定される門の床面の高さで、百何十センチか、段差があることになります。このような城外と門の床面に段差がある門を「懸門」と言います。岡山県の鬼ノ城、讃岐の屋嶋城、そして大野城でも分かってまいりました。このような門の造り方は、今までの日本の古代山城では分かっていませんでしたが、朝鮮半島と比較研究の中で新たに分かってきたものです。

そして、この写真には、「雉城」と書いてありますが、鬼ノ城では「角楼」と呼んでいます。中世のお城に詳

しい方はよくご存じかと思いますが、このように少し飛び出している部分があると、攻撃された時に守りやすい構造になっています。実はこのような構造のものは先ほど言いました、金田城と屋嶋城、鬼ノ城だけにあります。

それが最近、これまた大野城でも分かってくるようになりました。そしてこの雉城ですが、このスライドにも書いてありますように横長型といまして、横幅と奥行きとの比で、横が長いグループは、車勇杰さん^{チャウジヤク}、という韓国で古代山城の権威の方が百済地域に多いということをおっしゃっています。そうしますと、この金田城跡は百済系のお城の造り方をしているのではないかとということが推測されます。このように、考古学でもいろいろなことが言えるようになってきています。

それから金田城には、城内に土塁がありまして、その土塁の内側に掘立柱建物群があります。このオレンジ色の帯状のところが土塁です。この土塁の切れたところに門の礎石があります。この年代が争点の一つになっています。土塁の断面図を見ますと、土塁の下ところに石があります。金田城は記録に名前が出ていますので朝鮮式山城のグループですが、土塁基部の石を見ますと、神籠石の石のように見えます。こちらは略図ですが、今の巨石遺構につながる土塁の後ろ側に石列がありまして、その上層に別の土塁が被っています。つまり、この部分もやり直しをしているわけです。では、このやり直しは、先程の城壁の石垣とどのように関連するのかな。このあたりがよく分かりません。さらに、この土塁の内側に建物があります。すごく小さい柱です。鞠智城にあるような、立派な倉庫になるとか、鼓楼になるとかそういうものではなくて、どうも本当の兵舎、兵隊さんがこここで張りをしていたのではないかという、そういうようなものが見つかっています。さらにこの金田城跡で興味深い

点は出土している土器が、このあとご説明する鞠智城の土器よりも古い段階のものが多くということです。正確に言いますと、鞠智城跡で出土する土器の一番古い段階から次の段階くらいのもので止まっています。鞠智城跡で比較的多く出土しています奈良時代以降のものは現時点ではよく分かっておりません。さらに対馬ならではの、七世紀の朝鮮半島系のもの、新羅土器が入っています。

次に、肥後鞠智城跡についてお話しします。鞠智城は西側と南側に土塁が累々と築かれていて、門があり、東側は崖がそびえていると言われています。そして城内に建物群が多数あります。

この図はその城内の様子を復元して描いたものです。この建物群の左下のところに鼓楼（八角形建物）があります。これもよくご存知だと思いますが、朝鮮半島のソウル近くの二聖山城^{ニセイサンギョウ}で、同様のものが見つかっていました。この鼓楼も朝鮮半島との関係でよく理解されています。また、この建物群の中には兵舎と想定されるものがあるのですが、先程の金田城のものより明らかに立派です。そういう意味では、金田城と鞠智城には違いがあるのかもしれませんが。そして、鞠智城では、先程の話にもありました百済の仏様、秦人と書かれた木簡などが出土しています。この木簡も先程、佐藤先生から伺ったのですが、地元菊池の人達の中にこのような朝鮮半島と関わる人がいて、お米を持ってきたものと思われまます。

私は岡山にありますので、岡山の鬼ノ城のなどを研究しています。この鬼ノ城ではおそらく城造りに朝鮮半島系の人が動員されたと思っています。といいますのは、当時の日本人だけではお城は造れないと思っていますからです。当然、地元の人々はこのような形の山城は知りませんし、その図面を描くことも、監督することも無

理だと思っています。そしてこの地域は古代に賀夜郡かやぐんに属しておりまして、まさに朝鮮半島の伽耶がやにつながる地域と考えられています。おそらくこの地元に着した朝鮮半島系の人達が動員されて、他地域にないような構造物を造ったのではないかと思っています。

そして、掘立柱建物と礎石建物の関係ですが、礎石建物の中には一部古いものがあるのではないかと思っています。このスライドはその礎石建物の内の一部古いと言われているグループの中の六四、六六号建物跡と出土土器の図です。これらの土器ですと、②番が七世紀の後半ないし終わり頃、④番が八世紀に入るくらいですので、まさに繕治の時期に当たるのではないかと私は思っています。このように、礎石建物の一部はそういう時期にあると思っています。

この図は、鞠智城・温故創生館におられる木村さんが作成された出土土器数のグラフです。七世紀前半まではあまり多くはないのですが、築城時と考えられている七世紀第三四半期に少し増え、さらに七世紀末〜八世紀初めの繕治の時期に急に増加します。この増える量をどう考えるのかということがポイントになります。六九八年の「繕治」を単に修繕と捉えるのか、ある程度新たなことをしていると考えるのかによって遺物の数の理解の仕方が異なると思います。先程の礎石建物の問題などを含めますと、私は当然修繕も行い、そして一方で何か新たなことをしている可能性を考えています。つまりその繕治の時に礎石建物を新たに建てるなどということもあってもいいのかなと思っています。少なくとも、この土器の多さは、やはり何かをしていないと多すぎるのではないだろうかと思っています。

そして、八世紀第2四半期、第3四半期、つまり八世紀の半ば前後には、空白があつて、また八世紀の終わりにくりに増えています。土器というものは、どうしてもその使っている年代の幅があつたりしますので、そう簡単ではありませんが、九世紀後半の土器は記録とも合いますので、やはり何かを表していると思つていいのかなと思ひます。

さらに言いますと、六四号建物跡の所で出土している瓦ですが、百済系だ、新羅系だという意見がありますが、時期的にはさほど新しいものではなく、八世紀の初頭くらいまでしか下がらないと私は思っています。おそらく七世紀の後半と考えるのが一般的だと思つていますが、まさに繕治の段階に該当するのかなと思つています。

次に、岡山の話に移ります。こちらは地元の山陽新聞が作った鬼ノ城の模式図になります。城の周りを城壁で囲み、中に建物群があるという構造です。鬼ノ城の門や城壁は写真のように一部復元整備されています。各地の古代山城で様々な整備が始まつていて、鬼ノ城も整備が進んだうちのひとつだと思つています。この右側の建物が西門で、この左側のものが角楼と呼んでいるものです。この茶色の部分が城壁を復元したものです。

これが西門の中の状況ですが、床面に花崗岩（かこうがん）を敷いた立派な門です。外から中に入り、階段を登ると、正面に板壁があります。同じような壁があるものとしては大野城があります。そして門扉の部分にこのような礎石（いし）があります。唐居敷（からいじき）という言葉を使いますが、柱を地面に埋める掘立柱式（ほりたてしき）のもので、四角い柱を穴に埋めて立て、この石を添えます。そしてこの小さい四角の部分、この四角い穴が方立用（はたてよう）の穴で、柱と扉の間の隙間から攻められないように造つたものです。このマルで囲んだ所は軸摺穴（ちくずりあな）と言つて、扉の軸をここに入れて回るようにする場所

です。数年前に大野城で、その下の金具が見つかりまして、すごく注目を集めました。そしてこの軸摺穴の有無というのが大事でして、鬼ノ城もありますが、中国地方の山城にはない例がかなりあります。軸摺穴が無くても門の開閉はできないことはないのですが、古代の場合、だいたい軸摺穴はついていますので、ひとまずこの鬼ノ城のものが標準的なモデルだと思っています。

また、城内にこのような建物群がごいます。この写真は発掘調査中のものですが、山の斜面をカットし、礎石を並べ、建物を建てています。先程、鞠智城で土器の話をしたが、鬼ノ城も、担当の方が頑張つて土器を集成してくれています。右側にありますが、千葉県佐倉にある国立歴史民俗博物館の林部さんが、以前、飛鳥京を掘っていた時の土器変遷図です。図を見ますと、中央少し下がったところの、飛鳥Ⅲの「飛」の字の横方向にちょうど土器が並べられていない空白部分があります。林部さんは、まさにこの空白を天智天皇が天津に都を動かした時期に該当すると考えています。つまりこれが六六七年くらいの話になるということです。そうしますと、鬼ノ城の①③の土器はそれより古く、④、⑥⑩の土器はそれより新しくなります。器の碗の大きさが、小さいものから大きくなる境目がまさにここにくるのですが、鬼ノ城の土器を素直に見れば、やはり六六七年頃築城という可能性は当然考えられるわけです。ただ、土器といいますが、後まで残りますので、これらをすべて含めて七世紀の終わりという考え方もあります。確かにそのような考えは成立しようと思いますが、素直に見れば私が述べましたように六六七年頃の築城はあり得ると思っています。

そして、もう一つ大事なお話をします。この石垣部分を高石垣と言ひまして、先程の門の横に復元されてい

ます。今、綺麗に復元されていますが、この写真が復元される前の状況です。この石垣の横の部分はもう流れてしまっていますが、石垣の部分は比較的よく残っています。現在復元されているものの上部はそれを基に積み直したものです。皆様方のお手元の資料ではお分かりいただけるかと思いますが、この網をかけております部分が修復、整備をする時に、積み直した部分です。一番上の図が上から見た図です。石垣を積みむ時、普通に積みむのでしたら石垣の線に沿う形で土塁の外面を切り、石を積みむのですが、ここはこのような弓なりになっています。このような様子は、壊れたことによるのではないかと、私は思っています。担当者の方はそうではないと言っていますが、少なくともこの部分に関しては、私は積み直している可能性があると思っています。この積み直しに関する記事はありませんが、「修繕」「繕治」している可能性はあると思います。

このような積み直しや設計変更と推測される例が、豊前の御所ヶ谷神籠石でもいえそうです。こちらは少し特異なのですが、中門の西側部分を発掘調査したら、途中でどうも土塁を造らずに、列石を並べた段階でやめてしまった、設計変更したのではないかと言われています。これだけの規模の大きいものになると、修繕や設計変更なども当然考えてもいいだろうと思います。この写真はよく知られている中門の横の所にある列石と、版築土塁です。このように高さ約三メートルやそれを超える土塁が築かれています。この写真が先程申し上げた中門西側の列石と土塁の状況です。列石は確実に据え置かれ、裏側に一部版築はしていますが、この高さ以上の土は積みまれないようです。この段階で積みむことをやめて土塁・城壁の場所を変えたと言われています。

こちらがその中門西側を造り直した部分と推測されているところです。高さは立派に積んでいます、ここに

は列石がありません。このように設計変更する中で、いろいろ変化が起こっている可能性も考えられます。さらにこの写真は第二東門です。一応完成した門といわれておりますが、今回改めて未完成を意識して、城外から中を見ますと、前に土の壁があり、通り抜けできません。さらに、柱の痕跡などもよく分かっていません。こうしたことから、もしかしたらこの門も未完成なのかなと、気になり始めています。このお城に関しては、城壁がひとまずおおよそ巡っています。出土した①番の土器から、担当の方は、おおよそ七世紀の第三四半期、つまり大野城、基肆城と同じくらいの時期だと考えています。

ちなみに、②番のような土器も出ています。これはやや古く、また大きさによつては、七世紀の前半、中葉まで遡ります。やはりまだまだ検討の余地があるのかなと思っています。

二、未完成の可能性がある古代山城

こちらは福岡県の唐原山城跡です。この青い線が城壁想定線です。ただ土塁はありません。担当の方に伺うと、これは段を造っているだけだとのこと。この写真は城内南東部付近で、このように列石はありますが、土塁はありません。調査で明らかに列石を据えていることは確認されていますが、このような状況で止まっており、未完成としか言いようがないと思います。

次に阿志岐山城です。こちらは大宰府の横にあります。土塁はこの青い線との境目で止まっています。この青い線のところには土塁はないのですが、地形的にはこうではないだろうか、と推測されています。そしてこの一

二トレンチです。このようにきちんと積んだ石垣がありますが、そこから南東側はありません。そして出てくる土器ですが、これらはこれまでの資料より新しく、おそらく七世紀の終わりから八世紀の前半くらいの時期のものだと思います。少なくとも七世紀中頃まで遡るものはありません。

それから、福岡県飯塚市の鹿毛馬神籠石です。この神籠石も後ろ（右側）のほうで土塁が確認されていません。このため、前のほうだけ見せるために造ったという考え方があります。この後ろの方に關しましては、以前の発掘調査で、段状の部分が確認され、ここに石を置こうとしたのではないかと想定しています。つまり、段は作ったが、石を置かなかったのではないかと考えられています。

福岡の筑後にあります女山^{でやま}神籠石です。神籠石の西側に駄路が通っていますので、駄路（西）側しか土塁を造っていないという考えがあります。しかし、駄路に面する北西部も土塁がありません。さらに南東部で本来ならば、土塁があるはずのところになく、近くに古墳群があります。

それから、佐賀県武雄市にありますおつぼ山神籠石では、東側に駄路が通るので、東側のみ土塁を造っていると考えられています。しかし、現地に行ってみますと、西側にも点々と石が残っています。ただこの石はつながっていません。これもやはり未完成なのかなと、私は思います。

さらに、兵庫県の播磨城山城跡です。この城は中世に赤松氏に使われます。城壁線は黒い破線部が想定されていますが、石塁 a・b・c・d、それから門の辺り、これらの所は構造物がありますが、繋ぐ土塁が分かっています。さらにここには先ほども言いました唐居敷がありますが、方立、軸摺穴がありません。これがなくても

できるという考え方もありますが、唐居敷自身、実際には置かれておらず、動いています。

それから、山口県の周防石城山神籠石いわさぎです。これも土塁や石垣は確認されていますが、それ以外はよく分かっています。ただし、南水門であるとか、東水門などの施設は確認されており、この北側の門の所では、唐居敷があります。ただ、ここも方立と軸摺穴がありません。香川県の讃岐城山跡は讃岐国府という当時の中心地が眼下にあるお城です。ここでは二重の城壁線が見つかっているのですが、未完成の城と考えられています。唐居敷は、柱に添えるコの字の削り込み部分だけしかありません。つまり、方立や軸摺穴がありません。さらに柱に添える方形の削り込みさえ、途中で止まっているものがあります。もう明らかに未完成です。このように讃岐城山城跡はどう考えても未完成といわざるをえないと思います。

このように古代山城は完成していたのか、城内の建物はどうかだったのか。それから未完成にもいろいろなことが解ってきています。完成した山城と未完成の山城の間でどういう意味づけができるのか。最後に繕治、これをやはりきちんと考える必要があるだろうと思っています。

三、完成した古代山城と未完成の古代山城

さて、結論です。完成した古代山城と考えられるものは対馬金田城、筑前大野城、肥前基肄城、肥後鞠智城、備中鬼ノ城があり、豊前の御所ヶ谷もその可能性があります。讃岐屋嶋城跡は詳細がわかりません。そして、長門の城、高安城も詳細不明です。素直に考えれば、朝鮮半島から攻めてくるとき、まず大宰府に来ることが想定

されます。そして倭は大宰府を当然守ります。さらに大和を守る場合の一番のポイントは、備讃瀬戸になるのではないかと思われます。すぐく大事な場所で、交通の要所になっています。そこで六六七年に金田城などともに屋嶋城が築かれたものと思われます。またこれは偶然の結果かも知れませんが、源平の戦いの時も、この屋嶋が戦場になっています。やはりこのエリアはとても重要で、初期の段階にきちんと造った可能性があります。そして鬼ノ城もほぼ同じ頃に造られた可能性があります。

朝鮮式山城と言っているものは、六遺跡中の四遺跡はほぼ間違いなく完成していただであろうと思われます。さらにこれに、屋嶋城などを入れると、やはり朝鮮式山城という記録に載っているお城は、ある程度完成していたものと思われます。今日、あまりしつかりとお話しできませんでしたが、これらの城には基本的に門が存在します。そういう意味で、門がきちんとできているということは、やはり意味があるだろう思います。

それから、神籠石系のもので、実際に門が確実にあるのは、この鬼ノ城のみです。御所ヶ谷神籠石は確かにありますが、よく分からないものもあります。そういう意味で言うと、これらの完成したお城というのは、門がしつかりあるということが特徴の一つになると考えられます。そして、鞠智城に、しつかりとした門がいくつもあるということは、意味があるのだと思います。

そして完成したお城は、それだけ大事な場所にあり、そういう意味で、やはり古い段階から造っているのだらうと私は思っています。それから、未完成に関しては、意図的な未完成と、しようがなしの未完成があるかと思っています。これは微妙ですが、考古学の中で、神籠石と言っているものは、これらの朝鮮式山城より古いのか、

新しいのか、さらに新しいとしたらいつ頃なのか、天武朝とか、持統朝ではないかという意見があります。どちらの考え方でも、未完成はあり得ますが、答えが見つかっていません。いずれにしても、「見せる」という意識の中での未完成というのは、十分あると思います。ただし、単に偶然的の停止ではなく、やはり政治的なもの、社会的情勢を反映しているものと思います。

おわりに

実際に、お城を造るということは簡単なことではなく、そういう意味で、未完成と完成、それから未完成の諸段階における遺構の有無、多寡、つまり、中に建物があるか、あるいは遺物があるかどうかなど、そういうのもやはり大事な検討の余地なのだと思います。そして、先程から繰り返し申し上げているのは、繕治です。この時期の繕治の意味というのは、当時の国家情勢は当然安定しているはずですので、他のお城との性格の違いがあるのだと思います。だから、高安城に関しては、実は城壁がよく分からないので、今回外しましたが、やはり繕治記事があります。そうすると、やはりその辺の意味があるものと思います。そういう意味で、考古学的に言われている鬼ノ城の修理というの、やはり意味を持っているのだと思います。そういう意味で、私の先輩でもある石松さんという方がおっしゃっていたのですが、未完成と皆言っているが、こうやってまとめて全般的に言ったものが無いので、それだけでも成果はあるかなと思っています。まさに、そういう見方、完成、未完成、繕治とというのはお城を維持するということも含めて、意味があるだろうと思っています。

ちようど時間となりましたので、ご清聴どうもありがとうございました。